

## 重複障害幼児の感覚機能の発達

### ——振動覚・聴覚のなりたちと発声行動の変容——

荒 川 哲 郎 (障害児教育研究室)

#### 要 旨

乳児期から入院生活を繰りかえしていた一重複障害幼児の初期学習における変容過程を記録し、その分析・検討をした。感覚機能が初期のレベルにある本児が振動刺激に興味を示したことをきっかけとして振動刺激による課題学習を始めた。そこで、振動刺激を媒介とした「他者」とのコミュニケーションが確立してきた。触・視・振動覚と共に、聴覚機能の発達もみられた。とくに、聴覚-音声フィード・バック系の確立にともない発声行動に変容がみられた。そして、コミュニケーション行動にも変容がみられ、他者の本児への理解を深めることができた。

#### I 問 題

感覚機能の発達が初期のレベルにとどまり他人とのコミュニケーションが確立していない重複障害児の教育開始の手がかりを見つけ出すことは非常に困難である。しかし、教育の開始をあきらめ、子どもを放置しておく感覚は受動的で固定化してしまい、発達が見られない。いつまでも自分の指をしゃぶっていたり、自分の好きなモノだけを触ったりして、他人とのかかわりの芽生えが見られない。そこで、「この子を放置しておけない、なんとかしなければならぬ。」という考えを礎にして「意味のない行動」「理解しがたい行動」として捨て去ってきた子供の行動を丹念に再度とらえ直さなければならない。そして、子どものそれぞれの行動に「内在する意味」を発見し、その意味に対応した教育的働きかけを行なうことが必要である。このような教育的指導の手がかりを求める行動観察の基本的考えを獲得するためには、まず私達自身が、子どもの主体性を認め、小さいけれども大切な意味をもつ子どもの行動の変化に気づく視点を育てなければならない。<sup>(6)</sup> 中島<sup>(7)</sup>は「感覚を、外界を機械のように正確に写す受動的なものと考えないで、探し、区別し、選択し、外界を構成し運動を調節する、生きた積極的な人間の感覚」としてとらえている。本事例においても、外界を探索する積極的な感覚機能の発達をめざした。このような目標を踏えて次の問題を設定した。①現在、本児が外界をとらえている感覚には、どんな感覚があるのか。それを使い、コミュニケーションは確立するのか。②このような基礎になる感覚を高めるためには、どのような初期学習が必要なのか。③さらに他の諸感覚の機能

を発達させるためには、どのような課題学習が準備されなければならないのか。

このような問題を本事例において解明することは、子どもの行動の理解だけではなく、子どもにとって意味のある適切な課題設定の再構築につながると考えられる。本研究では、振動刺激に興味を示した一重複障害幼児が初期学習において振動刺激を使いながら、人とのコミュニケーションを確立させ、深めていく過程、さらに、補聴器装用による聴覚-音声フィード・バック系の発達により、本児の聴覚機能、発声行動がどのような変容過程を示したかに焦点をあて報告し、若干の考察を試みる。

#### II 事 例

##### 1. S (男児) 1975年11月生まれ。

##### 1. 生育歴

(1)、胎児期；妊娠2ヶ月じんま疹で3日間発疹。3ヶ月目に膀胱炎。その後、過労と睡眠不足、食欲不振続く。

(2)、周産期；9ヶ月の早産、前早期破水、正常分娩、生下時体重2500g、身長48.0cm、胸囲28.5cm、頭囲33.5cm、生後1週間哺育器に入る。

(3)、乳幼児期；生後4日目に後鼻腔閉鎖と診断される。ヘルニアの手術を受けて7ヶ月まで通院。8ヶ月後鼻腔閉鎖の手術。1歳まで通院。1歳6ヶ月、肺炎。2歳まで吸引器使用。首のすわり1歳6ヶ月。

##### 2. 医学的所見

2歳3ヶ月、両側感音性難聴、両側網膜、脈絡膜欠損症(内斜視、固定眼は右眼、右方視の時に眼振)、精神発達遅滞、小奇形、(耳介)(K県子ども医療センター)

表 1

①は指導者、㊟は母親を示す。

主な学習課題

2歳7ヶ月

1. 興味のあるモノをさわらせる。
2. 振動覚・聴覚の反応の観察。

2歳8ヶ月

3. 興味のあるバイブレータで、手や足やあごで振動を受容させる。

2歳9ヶ月

4. 補聴器を装着させる。(オーチコンPPX. Vol. 3)
5. 母親に補聴器のマイクをもち名前をよびかけさせる。(㊟に家庭での補聴器活用を指導)
6. 目と手の協応の訓練として玉をびんの中に入れる。

2歳11ヶ月

7. バイブレータ on の時碁石をビンに入れさせる。

3歳0ヶ月

8. バイブレータ off の状態で「アーイ」のサインを見せる。

3歳1ヶ月

9. タンスの前へ移動させて発声を促す。

3歳2ヶ月

10. ミュージック・バックでいろんな音楽をきかせる。
11. タンスの中に本児が興味あるものを入れ、さがさせる。

3歳3ヶ月

12. ①がタンスのひきだしをあけてやる前に「ちょうだい」のサインをみせる。

3歳4ヶ月

13. 食事場面で発声を促しサインの習得をさせる。

振動覚・聴覚活用

2歳7ヶ月

T<sub>1</sub>. 音楽のなっているミュージック・ボックスを近づけるとスピーカへ手を出す。

2歳8ヶ月

T<sub>2</sub>. 聴力検査時250Hz、90dBで「笑い」「目の動きとまる」「発声[ウー]」「スピーカに手をだしさわる」の反応がみられた。

2歳9ヶ月

T<sub>3</sub>. バイブレータに手をだす。Onになると「笑い」がみられる。

2歳11ヶ月

A<sub>1</sub>. 補聴器装着時(オーチコンPPX. Vol. 3) マイクに近づいて名前をよぶと「笑い」がみられる。

3歳0ヶ月

T<sub>4</sub>. バイブレータをonにすると、碁石をびんに入れる。

3歳1ヶ月

T<sub>5</sub>. ミュージック・ボックスを両手でかかえてじっとしている。(補聴器装着時—ベナトーンX600. Vol. 5)  
T<sub>6</sub>. 振動板が off になると発声。①の手をひいてさわらせたりする。

3歳3ヶ月

A<sub>2</sub>. 補聴器を装着しての(オーチコンPIIV. Vol. 5)聴力検査 500Hz、70dB、1 KHz70dBで反応がみとめられた。(行動の停止)

3歳4ヶ月

T<sub>7</sub>. うしろから的大ダイコ(90dB SPL)の音にふりむいて、身をのりだしてタイコをさがす。

発声行動

2歳7ヶ月

V<sub>1</sub>. 要求時は①の手を引っ張るが、声はださない。

2歳11ヶ月

V<sub>2</sub>. バイブレータで振動刺激をだすと「ウー」様の発声がみられる。

3歳0ヶ月

V<sub>3</sub>. 寝ころんではめ板の台を顔の上でさわりながら「アーアー」様の発声がみられる。  
V<sub>4</sub>. 「おはよう」「ありがとう」と㊟が補聴器のマイクにむかっていうと同じ様な調子の声をだす。(補聴器装着時—オーチコンPPX. Vol. 3)

3歳1ヶ月

V<sub>5</sub>. 興味のあるタンスの前になると「アーアー」様の発声がみられ、タンスのひきだしに手をだして「アイアイアイ」様の発声、ひきだしをのぞいて「アーアー」様の発声。

3歳2ヶ月

V<sub>6</sub>. タンスのひきだしを自分であけようとする。あく時は自分であけるがあかない時は「アーアー」様の発声がみられ、指導者の手をひっぱりに行く。

3歳3ヶ月

V<sub>7</sub>. タンスをつたい歩きしながらすみについて、歩けなくなると指導者の方をみて手をのばし「アーアー」様の発声。  
V<sub>8</sub>. 机の上にあるパンをみて「ダウダウダウ」様の発声。①の手をつかみパンを食べる。

### 3. 教育相談開始時の行動観察(1978年5月、2歳6ヶ月)(内田<sup>(1)</sup>の記録による)

(1)、姿勢・移動；仰臥位や横臥位の姿勢が多く、自発的な移動が少ないがボールをころがすと寝返り(右回転が多い)や這行により移動する。また、指導者(以下、①と略す)が両手を出すと手につかまり座位姿勢をとらずに立つが支えをなくそうとすると①にもたれかかってくる。

(2)、視・聴覚；前方2～3mの地点のボールやミニカーを見つけるが耳側方向(とくに左眼)からの玩具を見つけることが困難である。また、玩具をゆっくり動かすと追視できる。聴覚面については、ガラガラや呼びかけに対する反応は認められなかったが、バイブレーター(Vibratory Sensation Meter, Model Au-02, Rion)を呈示すると振動盤に手を出して触れている。

(3)、身辺自立；食事はパンを好み固形物、野菜類、その他新奇な食物などを嫌う。食物を見ても手を出さず母親(以下②と略す)の手を口もとまで引っ張り食物が口に触れると自分の手で押し込む。水は透明ガラスコップからしか飲まない(②の介助を要する)。排泄は、おむつ使用で全面介助である。

(4)、コミュニケーション；頭をたたく、指をしゃぶる、タオルを手から離さないなどの自己刺激的な行動が顕著にみられる。また、音声言語の受信・発信ともに困難であるが、機嫌のよい時に稀に明瞭ではないが発声が認められる。また、②や①の手を引っ張るなどして自分の要求を他者に伝達しようとする行為もみられる。

## III 方法

本論文のデータは、著者の教育相談活動における観察指導をととして記録された。とくにS児の2歳6ヶ月から3歳4ヶ月にわたる指導時の記録をとりあげる。行動変容の分析は次の観点でおこなった。(1)主な学習課題、(2)振動覚・聴覚活用、(3)発声行動。

## IV 結果

上記の方法により表1を得た。なお、課題には数字1～13、振動覚活用にはT<sub>1</sub>～T<sub>7</sub>、聴覚活用にはA<sub>1</sub>～A<sub>2</sub>、発声行動にはV<sub>1</sub>～V<sub>8</sub>の記号を使った。

## V 考察

### 1. 振動刺激に対する変容過程

本児は教育相談当初、自分の指を寝ころびながらしゃぶっていたり、タオルを口に入れてかんだり、いつまでもさわっていた。玩具の音や呼びかけに対しても一貫性のある反応が認められなかった。このように、自分の身体の一部や特定の「モノ」に固執して、他のモノやヒトにかかわろうとしないため、本児とのコミュニケー

ションを確立することが困難であった。それは、本児の乳幼児期における入院生活のくりかえしが一つの発達を阻害している原因とも考えられる。入院生活中の単調な生活のリズム、狭いベッド、母親やごく一部の人に限られた人間関係が、視・聴覚の障害に併せて発達を一層遅らせたと推測される。外界の刺激に対応した運動の自発がみとめられなかったのは、残された感覚機能がうまく使われていなかったためとも考えられる。「自分の指をいつまでもしゃぶっている」つまり自己が刺激を発信し、それを自己が受信する自己刺激的様相から脱してまず、外界を安定して受容し、運動を自発する初期学習をおし進めることが重要になる。さらに運動の自発を調節し、外界を選択的にとらえることへと高めていかなければならない。

「睡眠中に足音の響きで起きる」と母親の家庭での観察による報告があったり、行動観察中に「音楽のなっているミュージックボックスを近づけると、スピーカへ手を出す」(T<sub>1</sub>)ことがみられた。そこで、指導者は、本児が振動刺激に対応し、それに興味をもっていると考えた。そして、バイブレータを使い振動覚における反応の観察をおこなった。すると、本児が自分から「あご」手などで振動刺激を受容することがみられた。本児の振動刺激受容の問題点として、本児がバイブレータを手で触わる時に視覚により手の動きが調整されていないことがあげられる。ここでは、手で触わっている「モノ」を見る→手で触わっている「モノ」を注視する→さらに指先までみつめるようになる。つまり、バイブレータの注視、そして、手の動きの追視がバイブレータの位置づけに必要な条件となる。そのためには、内田<sup>(1)</sup>が指摘している「安定した座位」を確立することが基本的な課題となる。逆に、本児が興味のあるバイブレータを注視の対象としてとらえ、対象の機能を認知することにより、姿勢の変化が生じることが予想される。

補聴器の適用を目標とする聴覚域値の把握のために、くりかえし聴力検査をおこなった。聴力検査は条件詮索反射聴力検査(Conditioned Orientation Reflex Audiometry: COR Audiometry)をおこなった。最初は室に慣れないためなのか、母親のひざの上での座位が不快なのか、そりくり返り泣いた。菅原<sup>(5)</sup>は「重複した障害をもつ幼児の場合、聴力検査時、部屋から部屋への移動や母親以外の者からのかわりを拒否したり、いわゆる用心深いと思われる傾向が強い。」ことを指摘しているが、本児の場合も検査室への慣れ、検査者とのコミュニケーション関係の確立に長時間を要した。本児は母親のひざを離れてスピーカに近づくことがしばしばみられ、COR検査の光と音による条件反応形成が困難であった。しかも、聴性反応の指標となる「眼の動き」が、眼振・内斜視であるために使えなかった。本児と光刺激

との距離が約 1.5m あり、本児の視野の狭さを考えると、光刺激をとらえにくいのではないと思われる。

振動として受容されやすい 250Hz、90 dB で、「発声 [ウー]」「スピーカーに手をだし、じっとさわる」「スピーカーに頭をつける」の反応がみられた。(T<sub>2</sub>)ここでは、振動に対応する「スピーカーに頭をつける。スピーカーに手をだす。」「発声」などのいろいろな振動刺激に対応していると思われる行動がみられた。

2歳9ヶ月になると、パイプレータの振動刺激に対応して「笑い(ほほえみ)」がみられた。(T<sub>3</sub>)ここには指導者がつくりだす快的情况を本児が共有していることがうかがわれ、人との同調性<sup>(2)</sup>が現われ始め対人関係の基礎が形成されたといえる。

中島<sup>(7)</sup>は、『ヒトとしての感覚が成立し、運動の自発が盛んになる最初の大切な芽生えは「ほほえみ」と「運動の停止」である。』と指適している。ここにみられる本児の「笑い(ほほえみ)」は、大きな興奮ともなう緊張状態ではなく、安定した状態で振動刺激を受容していると考えられ、外界の刺激に対応する運動の自発が活発に始まる前兆となった。このように「ほほえみ」「行動の停止」は本児の場合も発達の大きな節になっていると思われる。このような発達の節において、運動の自発をもたす課題学習の設定が必要である(課題7)。そこで、パイプレータの振動刺激を受容すると指導者が本児の手をもち、碁石をビンの中に入れることを課題とした。「碁石をビンの中に入れる」課題学習においては、対象を感覚でとらえ、さらに視覚によって手の操作を調節することを目標とした。振動刺激を10秒から20秒受容した後に、パイプレータの振動をとめ、本児の手をもち碁石をビンの中に入れることをくり返した。本児の手をもつことをしだいに減らし、指導者は碁石を見せて、本児に手わたすようにした。振動刺激に対応して、しだいに指導者との約束された課題を遂行できるようになった。これは他者との間に共通な事象を共有し、それを記号化していく出発点であろうと考えられる。次に、碁石をビンの中に入れると、すぐにパイプレータに手をのせることがみられた。(T<sub>4</sub>)これが繰り返しまれたことにより、本児はパイプレータの振動を要求していることがうかがわれた。つまり、「振動刺激の受容→ビンに碁石を入れる」課題が繰り返し重なるうちに、ビンに碁石を入れる→振動刺激の受容→「ほほえむ」というように、ビンに碁石を入れることが、振動刺激を獲得する手段に変化してきたと思われる。ビンの中に碁石を入れると、振動刺激を得られるという期待が本児に生じてきたのではないかと推測される。岡本<sup>(4)</sup>は、「このような期待が刺激となり、行動を生起させる」と述べている。本児にみられる振動刺激に対する期待は、「碁石をビンの中に入れる」という自発的行動をもたす大きな動因になり、さらに、現前のものだけにとらわ

れることなく、みずから期待する状況を構成することをおこないつつあると思われる。

振動刺激を要求しているのに、振動刺激を off の状態のままにしておくと、発声し、指導者の手をひいてパイプレータをさわらせることがみられた。(T<sub>5</sub>)これは、まわりの「ヒト」の手をもち、その「ヒト」の手によって自分の期待する状況を要求していると考えられた。ここでは、「他人」の手の機能を知り、自分の手がかりに使っていることが注目される。「自己」と「他者」の手を区別してとらえていることから、「自己」と「他者」との距離化が始まり、言語機能の基盤が獲得されているように思われる。しかも「ヒト」に働きかけることにより「モノ」を獲得する、自己→ヒト(他人)→モノ(振動刺激)というコミュニケーションの様相へと変わってきた。これは(T<sub>5</sub>)におけるヒト(他者)→モノ(振動)→自己とは質的に異なるコミュニケーション様相である。そして、「他者」との関係をさらに深めるために、振動刺激が off の状態を規約性の高い身ぶりサインにより表していく課題(課題8)も必要となってくる。しかしながら、(T<sub>5</sub>)にみられるように、聴覚だけではまだ外界をとらえることが困難である場合、刺激を手でさわり、みつめながら確認することが、外界把握の大きな支えになる。このように、聴覚が十分に使いこなせないとき、聴覚の受容体制を支える基礎の感覚として、触・振動覚が重要となる。

## 2. 補聴器の適用と聴覚機能の発達

気分のよい時みられる発声や振動刺激により誘発された発声を聴覚→音声フィード・バック系を確立することにより本児が自己調節することは、本児の言語機能獲得の一つの重要な必要条件となる。聴覚機能の自己調節獲得は下記のはたらきをもたらすと考えられる。①外界の刺激の中から自分にとり大事な信号を探索し、選択的にとらえる。②自己の発声の調節により、発声を道具的に使い分ける。また、補聴器の適用(課題4)により、母親との音声による情緒的やりとり、また母親の情緒的よびかけによる本児の音声受容のたかまりがみられることを期待した。(課題5)このように母親と子供が音声によっても心を通わすことが母-子共同体関係の一層の深まりをもたらすと考えられる。母親が補聴器のマイクロホンを持ち、笑顔で名前を呼びかける力動的な行動こそ聴覚補償の出発の姿であろう。

補聴器装用当初は、最大出力140dB程度の補聴器を装用したためか耳を床にすりつけるような行動がみられたが、しだいに慣れてきたようで、母親がマイクロホンに近づきゆっくり名前をよぶと「笑い」がみられた。(A<sub>1</sub>)また、母親からのよびかけにも明確な反応が認められなかったが、喃語様の発声の回数が増え、しかも、連続したリズムを持つ発声がみられるようになった。(V<sub>3</sub>)この

ような補聴器装用によりあらたにみられた行動の出現が、「モノ」をじっと見て、さわったり、人を注視する行動と重なりみられたことで聴性反応の確立と本児の他者や「モノ」との関係を深めていくことは関連があるのではないかと予想される。

補聴器適用の確認のために行動観察・聴力検査をくりかえしおこなった。発声量の増加と共に、場面状況の中で意味をもつ発声がしばしばあらわれてきたことは、補聴器によって聴覚補償がなされ聴覚-音声フィード・バック系の発達により、発声行動の自己調節がおこなわれてきたと考えられる。また、母親が「補聴器をかけるのをよろこんでいるみたい。」と補聴器を大切なものとしてしだいに信頼してきたようである。このように、補聴器が母子関係の中で意味のある役割をもつようになって、コミュニケーションには不可欠なものになってきた。

補聴器を装用しての聴力検査では、500Hz、70dB、1KHz、70dBで行動停止の聴性反応行動がみられた。このように、低周波数の刺激だけに反応していた本児は、次第に高い周波数の音刺激にも反応が認められた。この聴覚受容の周波数帯域の広がりはいずれ音声言語の受容・認知に必要な条件となる。指導者との振動刺激を媒介としたコミュニケーション行動の深まりのなかで、(T<sub>1</sub>)うしろからの大ダイコ(90dB SPL)の音にふりむいてタイコをさがす行動がみられた。見えない音源への探索行動は、本児の場合「モノ」をさがし、「モノ」を注視し見比べて確かめる、という視覚の発達、まわりのヒトに働きかけるコミュニケーション行動の発達のたかまりのなかでみられた。聴性反応、特に音源を探索する行動は、その行動の基礎となる「注視行動」、「モノへの認知」「人とのコミュニケーション」等の全体的発達がたかまるなかであられるのではないだろうか。

### 3. 発声行動のなりたちと言語機能の獲得

相談開始時は、指導者が抱っこすると、そりかえり泣いていたが、「気分がよい時」は「ウーウーウ」という発声のみがみられた。自分がほしいものを要求する時は、母親や指導者の手を引っぱる。(V<sub>1</sub>)このような人のかかわりを促す場面を設定し、人を介して物とかかわり、物を介して人とかかわる「三項関係」<sup>(3)</sup>の確立をすることが、言語機能発達の重要な基盤になると考える。そのためには次の二つが基本的な課題になる。①本児はいろいろな「モノ」に触れ、それを注視する。(課題1)②母親や指導者が本児と経験の共有を重ねる。とくに本児の要求行動がみられる時は、本児の手の届く範囲にいて、(物の介在した動作の共有)

さらに、発声量の少なさは、本児の聴覚-音声フィード・バック系が発達していないため、発声の自己調節がうまくできていないためと考えられる。それは、本児の全体的な発達のおくれと同時に聴覚の障害に対する補償

がなされていなかったことによる。そこで、本児の聴覚-音声フィード・バック系の確立のため、補聴器の装用をめざした。外界からの音受容を高めるだけでなく、振動刺激などにより誘発された自己の発声の調節にも補聴器装用の意義を追求した。補聴器装用後には、自発する発声量、発声の種類が増加しただけではなく、発声が連続するリズムをもってきたことが観察された。それは特に、本児が興味を示す「モノ」とかかわりあっている時にみられた。(V<sub>2</sub>)しかし、他人の顔をみながら発声することはみられず、自己-モノの間だけの発声であり、伝達の意図はみとめられない。

補聴器のマイクロホンをもって名前をよびかけたり「オハヨウ」「アリガトウ」などを指導者や母親が本児の顔をみながら語りかけると「ほほえみ」がみられたり、まれに呼びかけられた声と同じ様な調子の声をだした。(A<sub>1</sub>、V<sub>2</sub>)このような母親からの働きかけに本児が「ほほえみ」それをみて母親がすぐに話しかけるような母と子の交互作用は、模倣行動の基盤になるだけでなく、母親の養育を支える大きな力となりえたと思う。岡本ら<sup>(2)</sup>も乳児の研究において「初期の安定した豊かな人間関係、つまり情動の一体性が発達の出発点になっていることがわかる。」と述べているが、本児の場合、母親が一体性を獲得できたことにより安定した情動の共有をもたらしと思われる。

3歳1ヶ月頃から、タンスのひきだしをひっぱることに興味を示し始め(課題9)、しだいにタンスの中にはいる「モノ」に興味が変わってきた。(課題11)「家でタンスの中のモノを全部だして、ちらかしてばかりいる。」との母親の報告は印象深い。そして、タンスの前にきた時や、タンスのひきだしに手をかけた時、ひきだしをのぞいた時などに発声行動が頻繁に出現した。(V<sub>3</sub>)このような特定の状況における特定のモノ(タンスやタンスの中の人形)に向って発声されている。これは発声と対象の対応関係が確立され発声がある特定の意味をもち始めてきたと推察される。そして、本児は「モノ」を注視したり、さがしたりすることが多くなり、タンスにそっての伝え歩きが、みられるようになった。このような「モノ」を探索する行動を支える基本的な行動として、モノをさがわり、モノを注視し、モノを追視することがあげられる。(V<sub>4</sub>)本児はタンスの中の「モノ」をとりたいため、タンスの前へ伝え歩きで行くようになった。本児がタンスの前へ行くとき必ず母親もタンスの前へ行き、本児-母親-タンスの中のモノ、(人形)の三項関係をつくりだした。本児は、タンスのひきだしがあく時は自分であけ、中のモノをとりだすが、あかない時は、発声し、そばの母親の手をひっぱりに行く行動がみられた。本児が現前しないタンスの中の「モノ」に要求を示したことは注目される。これは本児の過去の経験(タンスの中の人形を

さわったり、みたり、母親へわたししたりした)が、イメージ化され、そのイメージにより、目にみえないモノへの要求がでてきたと思われる。このような未来への予想・期待を内含した発声であり、要求行動であると考えられる。そこには「私ハ人形ヲとりたいでダンスのひきだしをあけてホシイ。」という文構造が見い出せる。(V<sub>1</sub>)この発声は、遠くにいる「他者」に意図をもって向けられていると考えられる。「他者」の距離を接近させ、「他者」により、自分の現在の状況を変えようとするものである。発声の内容を場面状況とあわせて、意味づけをしていくと「私ハ今、困っているから助けてほしい。」と解釈される。ここには、自分の現在の状況を叙述し、他者へ要求しているパターンが、うかがえられる。このように発声の意味の含らみとともに子音様の発声もみられるようになってきた。

## 謝 辞

稿を終るにあたり、本児の教育相談と一緒に行ない、本研究にも協力していただいた国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部研究員内田芳夫氏(現鹿児島大学)重複障害教育研究部長大坪明德先生、聴覚・言語障害教育研究部長今井秀雄先生をはじめ国立特殊教育総合研究所員の方々に感謝申し上げます。

なお本論文の要旨は日本特殊教育学会第17回大会において口頭発表をおこなった。

## 引用文献

- (1) 内田芳夫、大坪明德 視・聴覚障害を伴う重複障害児の課題学習について、事例的考察、国立特殊教育総合研究所研究紀要、第7巻、121-131、1980.
- (2) 岡本夏木、野村庄吾 共鳴動作から模倣行動へ、同型パターンによる人とのかわり、ゼロ、一歳児の発達の特徴と保育、幼年期発達段階と教育1、子どもの発達と教育4、46-54. 岩波書店、1979.
- (3) 岡本夏木、野村庄吾 三項関係の成立、物を介して人と、人を介して物と交わる「やりとりのパターン」、ゼロ、一歳児の発達の特徴と保育、幼年期発達段階と教育1、子どもの発達と教育4、54-57. 岩波書店、1979.
- (4) 岡本夏木 言語機能の成立過程(そのII)、会話的行動の成立、京都学芸大学紀要A. No.27. 73-80. 1965.
- (5) 菅原廣一 重複障害児の言語発達、ろう教育科学、19(2)、76-89. 1977.
- (6) 高杉弘之、山下滋夫 重度・重複障害児の行動観察の意義、発達の把握と日常生活の指導、39-54. 岩崎学術出版社、1979.
- (7) 中島昭美 人間行動の成り立ち、重複障害教育の基本的立場から、重複障害教育研究所研究紀要、第1巻、第2号、1-39. 1977.

## 参考文献

- 荒川哲郎 重複障害児の行動変容過程、事例による考察、192-193、日本特殊教育学会第17回大会発表論文集、1979.
- 荒川哲郎他 聾・精神遅滞児の振動覚・聴覚の活用、国立特殊教育総合研究所研究紀要、第6巻、79-87、1979.
- 荒川哲郎他 重複障害児に対する振動覚と聴覚の活用—フォネータの利用と補聴器の適用について—、Audiology Japan, 20(5), 1977.
- 村井潤一 ことばの獲得のメカニズム、乳幼児期の言語発達、ことばの発達とその障害、第一法規、1976.